語り継ぐ浜松―このまちで暮らして

No. 02 中村グレイス Grace Nakamura

結婚して生活することで、初めて日本に来たって感じました。

ナカムラ・グレイス

1997年来日。HICEの日本語教室がきっかけで、フィリピン人の同胞グループ「フィリピノナガイサ」があることを知り入会。3代目代表。浜松市近郊のフィリピン人女性が中心となり、日本語学習支援、生活相談や支援、子供の学習支援などを行っている。フィリピンの子供が増えているのを感じ、2012年には同団体をNPO法人化した。「ナガイサ」はタガログ語で「仲間」の意。

生い立ち

――グレイスさんはフィリピンのどちらのご出身ですか?

レイテ島のカイビランというところで生まれました。でも、そこは生まれただけで、育ったのはマニラ。幼稚園からマニラのラスビーニャスシティです。

――どんなご家族なんですか?

父はもう亡くなりました。優しくてあんまり怒らなかったですね。母は厳しかったです。勉強のことはそんなに言わないんだけど、家のこととか、お手伝いとか。あと、必ず学校に行きなさいと。

兄弟は私を入れて6人です。私は4番目。兄、兄、兄で私。下に、妹、弟がいます。兄3人は仕事で海外にいます。妹と弟はフィリピンにいます。2、3年に一回みんなで集まっています。

――マニラの学校時代で印象に残っていることはありますか?

日本の学校には無いアメリカ系の軍隊みたいな勉強ですかね。CAT(Citizen Army Training)(※1)っていう。中学4年生はみんなやるんですね。私は中学3年生の時にリーダー研修を受けて4年生でリーダーになりました。CATはちゃんとやらないと卒業できないんです。女の子も全員やります。今はわからないけど、私の時代はそうでした。強くなるためとか、たいへんなときにどうしたらいいかとか、サバイバルですかね。一年間だけですが、授業もあります。学校は月・水・

日本への恩返し

――そのときは、何人ぐらいで支援活動をしたんですか?

浜松から出発したのは9人くらいかな。100人くらいに声をかけて、「行く行く」って返事ももらっていたんだけど、向こうに行ってみると、誰も来ないの。私、みんなのためにTシャツ100枚作ったんだけどね。だから現地でみんなに電話かけて、声かけて、そしたら51人になりました。原発事故があったばかりだし、みんな「放射能にやられたくない」って怖がってたから、「ここは安全なとこだよ」って伝えました。そこには1週間いたよ。最後の日なんかもう、ほんと疲れちゃって。気疲れっていうのかな。みんな、テントで寝たりして、寝るとこもなかったから、良く寝られなかったしね。

集まった51人はほとんどブラジル人。日本人は2、3人かな。バスで名古屋から30人来てくれました。ビッグパレットふくしまっていう施設はいろいろと規制があって、なかなか厳しかったのね。「シュラスコを朝から晩まで焼いていいか?」って聞いたんだけど、「ルールでは2時間だけ」って言われたんですね。本当は昼の12時からしか炊き出しはダメだったんだけど、たくさんの人が朝の7時から並んでた。だから、ほんとはやっちゃいけないんだけど、焼くのが間に合わないから、朝の5時からやったこともあります。

夜はみんなで集まって反省会もやりました。「もっとできることないか」って。私たちが来ても、やることないじゃないかと。だから音楽隊を連れてこようとか、マッサージをしようとか。そういうことをみんなで決めました。

それで音楽する人を連れてきたんだけど、こんなにみんなが悲しんでるところにサンバなんてダメだと言われたんですね。結局、施設の中ではできなかったから、道路のすみっこでやりました。結構な人が集まってくれて、みんな笑顔になったよ。

やっぱ、みんなね、最初は暗〜い顔してたんですよね。でも笑顔になってきて、おばちゃんも若い子も踊ってくれました。ものすごい良かったよ。その中でおばちゃんが涙流しながらいろい話してくれるんだよね。「自分も死ねばよかった」って。そういう悲しいこともいっぱい聞いてきました。

被災地での活動が終わると、あちこちから要望があってね、でも肉がないから注文して宅急便で送ってもらうようにして、あちこち行きました。最後は石巻。もう肉が無いから、石巻では、家の中の泥を片付けに行きました。マスクしてスコップで泥を全部袋に入れるっていうそういう仕事。大勢で泥を全部取り除いて、やっと一軒きれいにできました。

――なぜそんなに一生懸命支援することができたんですか?

日本への恩返しです。私たちがみんなブラジルで困っていたときに、日本の政府が私たちに仕事を与えてくれたんですよね。ブラジル人に仕事を与え、家を与え、それでブラジル人はお金をたくさん稼げました。それでブラジルに帰って、マイホームとか新車を買って、みんな幸せになっているんですよね。だから日本が困ったときに恩返しするの。

私はいろんなことを経験してきたけど、人生で初めて被災地に行きました。本当にびっくりしちゃってね。こんなことが世の中にあるんだろうかって思った。私は何をしていいかわからなくなった。7日間、一所懸命頑張ったけど、最後の帰る日になって私は倒れちゃったの。疲れがいっぺんにきちゃってね。その後、2日3日寝込んじゃった。でも、本当に行って良かったと思います。

HICEへのメッセージ

HICEってね、ブラジルにはない組織。外国人にとって、とてもためになります。わからないことといっぱいあっても、HICEに行けば、なんでも教えてくれます。本当に私は応援しています。

――HICEがこうなったらいいなと思うことはありますか?

HICEに行けばこういうことも解決できるとか、こういうこともわかるとか、外国人にわかりやすく教えてほしいですね。イベントのことはよく載っているけど、HICEの仕事自体がみんなまだわかってないから、それをもっと表に出したほうがいい。HICEのやってる重要な仕事をね。国際交流もやってるしね。新しい人がブラジルからも日本にどんどん来てるから、HICEの役割をもっともっと伝えたらいいと思います。

――貴重なご意見ありがとうございます。最後に、増子さんはこのまま浜松にずっと住むおつもりですか?

私は日本にすごくよくしてもらったし、これから恩返しとしてね、人のために何かできないかなって思ってる。これから困ってる人にいろいろと教えてあげるような、サポートをしたいなって。それで日本に骨をうずめたいと思っています。父と母の墓を浜松に買ってあるから、そこに一緒に入ります。

あと10年は商売をがんばろうと思って、そのあとはもう、任せます。そのときはもう77歳だよ。

※1 父系血統主義、父母両系血主義、生地主義など、その国の国籍をどのように生まれた子に与えるかは国によって違う。日本の国籍法は、父母両系血統主義を採用(国籍法2条1号、1984年の改正前は父系血統主義)。ただし、無国籍者の発生予防の観点から、出生地主義を補完的に採用している。(これだけは知っておきたい!外国人相談の基礎知識、2015、松柏社)

※2 浜松に住む日系ブラジル人から相撲や運動会の写真を見せてもらうことがある。地区によっては、日系人とブラジル人の合同運動会もあったよう。

※3 ハイパーインフレーションの記憶は日系ブラジル人にも鮮明のようで、銀行も政府も信用できずに本当に苦しい時代だったそう。お金の価値が一日で簡単に変わるので、油や砂糖を買いだめしていたという人も。

※4 リーマン・ショックは、2008年9月15日に、アメリカ合衆国の投資銀行であるリーマン・ブラザーズ・ホールディングスが経営破綻したことに端を発して、連鎖的に世界的金融危機が発生した事象を総括的によぶ。製造業の多い浜松でも派遣社員で雇われていた多くの外国人が職を失った。

※5 厚生労働省は、2009年4月から、厳しい再就職環境の下、再就職を断念し、帰国を決意した日系人離職者に対し、一定額の帰国支援金を支給する日系人離職者支援事業を実施。2010年3月まで続けられ、この事業による出国者数は21675人となり、そのうちブラジルは20053人で全体の92・5%だった。